

三月作品



その一集

寝室の窓を開ければ庭一面雪に覆はる 冬を安堵す
秋野菜友人知人に配り終へ畑仕舞とす小雪舞ふ日に
白菜は寒さに弱し外側の凍れる葉よりしをれ広がる
しびれたる手を労りて筆記する右曲がりの文字修正しつつ
自分の死を自分で見てゐる夢の中怪訝な顔の妻が見つめる

田中 愛子選

ファーストネーム

高橋 みどり *イギリス

単数の決め手なきまま単数の英語で訳す句中の猫を
みぞれ降る異国の街で床に臥し「万にひとつ」のひとつを思う
休暇中に寮で死んだら気が付いてくれるのは誰でいつごろだろう
ドクターが待合室に来てくれるファーストネームで患者を呼びて
人口に膾炙せずとも初の女性首相が言えは流行語大賞
につぼんはどこへ行くのか 働いて働いて、否、働かされて

畑 仕 舞

佐藤 武雄 青森

紅き葉の散りたる冬の枝々に新芽育むドウダンツツジ

馬

多田 美慧子 *宮城

珈琲を飲みたいと言って眠りしを覚めぬまま義母は此の世を仕舞う
自宅にて迎えし最期は願いどおり一年あまりのたたかいの末
もうこれでよいと決めしか潔く別れも言わず旅立ちにけり
うま年の義母が乗るはずだった馬は主をなくしどこを彷徨う
白波の玄海灘を見下ろして義母と歩きしコスモス畑
ひきこもり歌も作れぬ日々という思いも寄らぬ呟きを聞く

海が泣く声

小松 朝子 栃木

愉しみて少しづつ読む『生きるヒント』今日の暮しを明るく照らす
はらはらと紅葉散りくる中にして死はまだ遠しと思ふおろかさ
ひとひらの紅葉となりてわれは散り土に還りてまた芽生えせむ

波打ちぎはをころがる小さき石となり海が泣く声われは聞きたし
幾光年かわれは知らねど遙かより差しくる光に温しこの身は
泣きながら人は生まれて誰も彼も^か一步一步と死への旅する

消防士の孫 石川 絹 江 群 馬

御上より食料購入支援金五千円也何買ひませう
消防士になりたる孫に叱られぬストーブに干す洗濯物を
お互ひの生存確認するやうな集まりこの頃少し疲るる
さりきりと風の冷たさ増しにけり道理で赤城の山が真つ白
借り物の畑の年貢納めたり令和の世もなほ小作人にて
起きて寝る老いの暮らしの澱に似て障子の棧に埃がたまる

小田部 雅子選

蛇から貰った林檎 清水 佑太郎 * 千葉

季節性情動障害やってきて私の冬に私はいない
人生の点と点とが繋がって蟹座のように踏み潰された
今日という日がまた私を通り過ぎこの暗い井戸の空気動かず
水のなか体育座りで凝つとして鱗は固くガサと擦れる



冬のない完璧な島に移り住もう蛇から貰った林檎を持って
今日を終え明日のことは分からぬが拍動はなお鼓膜を叩く

光のアルルあるやうに 滝 口 良 子 神奈川

蝶ひとつ舞ふかと思えば窓の外を葉が散りゆけり箱根絢爛
紅葉の美術館にてファン・ゴッホの横向きの顔より正面の眼よ
ファン・ゴッホに光のアルルあるやうにわれに吹雪とクマの羽後がある
「教習中」の紙を貼りつけ黄のバスが駅前広場をまはりゆく朝
朝より銀杏黄葉は無頼にて坂をバギーをサラリーマンを打つ
川床の草みな刈られさむざむとあめんぼ一つ影なく流る

背からけふが 田 中 幸 子 神奈川

おだしさの夕べくれなる空に夕月たしか点りゆく街
天を指し直なる幹の静寂に万物のひとつかげもてとまる
濃淡の焦げ茶の翅の油蟬ごわつと木綿の織り地に似たり
時間^{とき}がきて起床するのは羽化に似てしんと背^{せな}からけふがはじまる
寒がり^{せな}は老いてますます進行し46キロ体温低し
ベランダの棧^{となか}に横長日の光おかれて師走時間しづかなり

ふ は ふ は 吉 山 孝 子 神奈川

ふはふはとこの身走るは何ならむ迷はし神や疫^{えやみ}の神や
気の遠くなりゆくわれはもうろうとうつつに二豎なる幻影見たり
血圧計二〇〇を示せる吾を抱へ車に医院へ運びたる友
血圧の高き憂ひにへ自己管理しつかりせよと亡き夫のこゑ



ひと夜吹く大風のなか散り敷ける末期の柿の紅葉の美し
嗚呼何と秋の日和の心地よさ黄花抜け咲く庭のつばき

冬の隣の 荒川 ゆみ子 東京

ゴールデンレトリバーの尾が揺れてこの世の空より公孫樹降り来る
バイオリンケース背負ひし人もどり明かりつきたり向かひの窓に
知り人のひとりがそこにあるやうな冬の隣の御茶ノ水駅
歳晩に餃子包めば五通りの襷があるなり五人の家族

「さあみんなボートに乗って」バターコーンラーメンのコーン連華でさらふ
新しいスマートフォンが馴染むまでわたしマリアナ海溝にぬます
狩野 一男選

あかりかかげて 平山洋子 東京

裾から銘仙を着る乙女子がスニーカーはき大股に過ぐ
ゆるき坂登りてうしろ振り向けば我が住む町に冬の日が射す
ところにより雨と言はれて家を出でところによらず傘持ち帰る
大きくすの根に足とられ転びたりくすくす笑ふ精霊の声
先生の命日なればつつしみて『山西省』読むあかりかかげて

『山西省』声に出だして読みゆけば我が声囁れて亡き母の声

窮境 北条忠政*東京

誰しもが8・15忘れぬが記憶薄れる12・8

オブラートに包まずばろつと本心をこぼした首相窮境に立つ
働け働けと発破かけずとも働かざるを得ぬ人には虚言
三時から働け働けと指示受ける人らの睡眠不足どうする

「熊」だった今年の漢字冗談でしょそんなものより「米」こそ本命
これから先何が起きるか分からぬと言いつつ九州一周企画

信頼 矢沢靖江 東京

青空にけぶれるごとく落葉舞ひからまつ林はオーボエを吹く
あの道この道いちやう散り敷くわが街の美しさびしき夜道をかへる
車窓より穏やかにさす秋夕陽少年は「走れメロス」読みをり
子守唄は子守少女の労働歌「おどまかんじんかんじん」かなし
日没を見つつ思ひぬ子育てで大事にしたのは信頼だった
夜毎ろし壁の守宮の今宵見ずジュラ紀の月に攫はれゆきしか

うつろなる日々 駒田文雄 新潟

子が先に逝きてしまへり家を継ぐうからあらざる老人夫婦
仏壇をもたざるわが家テーブルに息子の骨箱ひとたばの菊
四十九日の法事終りてをりをりに若かりし子の笑顔がうかぶ
子の逝きてうつろなる日々海のはて沈む夕陽を見にもゆきたし
うらやみて老はみてをり稲穂田に餌をついばむ白鳥家族

流れ星のやうな命ぞ子の逝きて頼れるうからだあれもゐない

歌会のおしらせ

高 橋 梨穂子 *新 潟

十九時に自由などない生活で行けない歌会のおしらせ捨てる
手を動かし頭を捻り糸つむぐように三十一音にする

見知らぬ地めざして紙の上という海すすみゆくこのボールペン
まるで脚立売場のごとく十一月二十四日の田んぼの線路

だれかさんみたいめがねをはずしてもかけてもみえないそこにあるほし
だれもないようなきがするこのよるのまどべにとどくとりなのなきごえ

風間 博夫選

日 々 草 山 崎 さちゑ 新 潟

濃く淡くダイダイ色の花咲かすマリーゴールド子の好きな花
子は花壇にマリーゴールド多に植ゑわれは紅白の日々草植う
三人子の幼き頃の抱きごこち思ひ楽しむ寝られぬ夜は

小さくてほつそり華奢な娘のからだ片腕だけで抱き上げたり
末の子は体細けれどしつかりと男の子の強き骨格ありき

買ひ忘れふと思ひ出しカート押しもどれは何を忘れたか忘る



米 一 合 磨 ぐ

高 橋 忠 一 福 井

回送の一輛たして三輛が芒が原を颯爽とゆく

ひとりだに乗客みえぬ終電は夜のしじまを遠ざかりゆく
介護施設へ妻を送りて早や十月しばれる宵に米一合磨ぐ
病院の検査の結果異常なし唯点滴に二日を眠る

わけもなき倦怠感に臥せし身の三日振りなる快便うれし
しづか夜を昭和の演歌聞きながらいつしか眠るよき夢みむと

米 寿

木 内 賢 隆 長 野

祝はるる米寿にあれど二度の風邪、帯状疱疹この身を襲ふ
なほ生きて人に役立つことありや米寿の年のはや暮れんとす
階段を踏みはずすこと多くなり手すり掴むが必須となりぬ
亡き父母のことをかたみに語り合ひ心やさしき従兄弟にありき
施設にぞ入りしと聞けど訪はず過ぎけふは悲しき訃報に接す
米寿なる友らの集ふ同期会ノンアル党が半数を占む

力士の 笑 み

辻 幾 則 岐 阜

湯舟から上がらうとして転倒す手のひら出血膝に青あざ
五十肩で馴染みとなりし若き医師膝裏伸ばせと実演し呉る
この若き整形外科医と他生にて縁あるらし従ひゆかむ
一階は初冬の寒さ二階にてセーター脱ぎて小春日あびる
優勝の瞬間さへも緩みなきウクライナ人力士の顔で
花道で付き人と抱き合へる時初めて見たたり力士の笑みを



ペン パ ル 大 塚 守 明 愛 知

ペンパルにカードと手紙を書き上げてポストへ向かふ師走の道を
ペンパルと慣れぬ英語で文通を始め遙か三十年ほど前

各国のペンパルたちのアルファベット字に癖ありて難読ありき
レバランド 聖職者アドウよいまはどうしてるエルサレムより文くれぬしが
文通で理解の友と思ひしが会ひて戸惑ふ顔を見せたり

オリオンを見上げつつ手紙出しにゆく文通ながき異国の友へ

小 島 なお選

た ま ゆ ら 伊 田 史 織 大 阪

遠ざかる電車に映る人影の朱きランプを挽ぐがにのびる
風が喉の奥で木霊するひゆういひゆういと笑ふはづみに

こぶし大のウロ生るる胸をとほすお茶冷めれば温め冷めれば温め
羽搏きをやめてたまゆら空にある翼と鳥と風と重力

雪もよに空のあをさの切片のこぼれつづける 玻璃めきて鳴れ
捧げらるるほどの香りの溢れたりあらせいとうを捨てようとして

へ 金 〳 鳥 越 英 子 兵 庫

半世紀、五十年その歳月をへ金と呼ぶのか ひなげしの花
こんな長いいちにちを三百六十五くわい五十たびいつしよに居たよ
はちみつときな粉とカスピ海ヨーグルト渦巻く五秒はい召しあがれ
へ月がでたでた月がでたへ令和七年最後のまんげつが唄ふ
わたくしの胎内をくまなくしつてる五人の子らをがむしやらに抱く
わがうから盆に正月寄り合うて飲んでしやべつてしやべつて食うた

故 郷 浜 崎 泰 子 兵 庫

温突オシダの温みを思ふわが生れし南浦ナムボはいまも雪積りゐむ

雪合戦して遊びたるをさな日よ雪につながるわれの郷愁

わが眉に伸びし白毛を見て思ふ百二歳で逝きし村山富市氏

わが乗れる電車の影は家々の壁を撫でつつ東へ進む

高く低く空をつきさすビル群のそびらに白き雲ひかへをり

貝がらが海のひびきを懐しむごとくなつかしわが生れ故郷

列 車 の 中 中 西 克 至 奈 良

寺よりの父母の年忌の知らせ来し母三年父二十七年

午前午後反戦集会はしごする眠気襲ひ来し移動の車内

「戦争は国公認の殺人」と駅の広場で翁訴へし

新渴の友より届きし洋梨はルレクチュエといふ初めて聞く名

家に居れば雑事に追はれ落ち着けず列車の中は自分の時間

父据えし石灯籠五基東南海地震起きれば心配と妻言ふ

ひたすら歩く

石田 信夫*鳥取

両脇のイルカのようなクロールを見ながらプールをひたすら歩く
「来年は冬用タイヤの交換をしない」と諫める人がいる

顔ざり中 心房細動の手術談床屋の客に耳をそば立てる

「カテーテル治療大したことではない。でも再発で再手術した」

町会に保護者のように付いて来る区長の妻は座を盛り上げる
店じまい「安倍商店」のマスクあり車内ボックスに厄除け果たす

津金 規雄選

二 日 月

藤井 弘子 岡山

病む耳が声をつかめぬそれだけで外界はわれから剥れゆくもの
左耳に鳴く宇宙からの周波数たましひはまだ元気でゐたい
カレンダーのクリスマスツリーの素直さがほのかな熱をわたしにくれる
サンタクロースを信じることの無邪氣さを父母に詫びたし貧しき日々の
二日月冬至の夜のかたすみをわづかに裂きてひかりをこぼす
クリスマスが返却期限の本をよむ神にかへさん一冊として

都 心 の 空

阿野 康子 山口

のぞみ号の窓にいつしゆん頭れて騙し絵のやう曇れる富士は
浜名湖畔養鰻池はさま変はり太陽光のパネルひしめく
さんいろに公孫樹は高しとほく来て初冬都心の空を仰げり
東京駅ゆきかふ人の波の間をキャリーケースを引きずりてゆく

あしびきの山手線に子の背中さすりき受験のかの冬はるか
法要の始まるまでをぶらぶらす二十寺ならぶ寺町通り

ひとりのラーメン

村上 篤 山口

あまりにも寂しき最後の同期会どのテーブルもやまひの話題
妻のぬい日常なんてそんなこと思ひたくない ひとりのラーメン
おほなる記憶を風が呼びもどす苑のベンチの頬を打つかぜ
折々に眩くドクターその中に本音の部分がありやと探る
犬にまづ挨拶をして気をほぐす先の非礼を言ひ出す前に
原因はわれにありやと朝からの言動なぞる 妻の不機嫌

もうそれだけで

武市 尋子*徳島

つつがなく今年の米の届けられ阿波の銘柄「絹ひかり」研ぐ
累々と今や収穫待っているキャベツの歌う「威風堂々」
「また今度」会うか会えぬか分からぬといまの気持ち明日へと繋ぐ
公園の幼児の可愛さ見つめれど誰も怪しまず老女となれば
有明の月道連れにみすずかる信濃を目指す長距離バスは
真っ白な雪のアルプス目の前にもうそれだけで来た甲斐のあり

空

胴 松本 博子*香川

空青き遊歩道ゆくわが影は猫背のままに映されており
胸の刺抜こうと園にぶらり来て冬のベンチに日向ぼこする
木の実降る夕べのベンチに忘れ物風にめくれる旅雑誌あり
バゲットの空洞のごときわが胸に冬の夕日を吸いこませゆく

裸木の下に佇めば別の吾になれそうな気分空を見上げる

欲張らず明日も一歩進めよう街路樹の枝にジャンプしてみる

藤野 早苗選

大 天 狗 野見山 弘 子 福岡

英彦山^{ひこさん}の樹々わたりゆく大天狗を見た者あらずますます親し
英彦山の犬天狗には会へぬままなうら深くもみちををさむ
（働いてまいります）といふその裏で働かされてる人あまたある
米びかへ買ひびかへの世にまた出会ふ脱脂粉乳世代のわたし
そろそろとねらはれるるやポストには葬儀社のちらしぼつぼはひる
あふむけに転んだまんまもう立てぬしんとひろがる空色のそら

レ ベ ッ カ 藤 野 紀世子 福岡

閉ぢた目に炎が揺らぐ暗やみに野十郎^{やじゅうろう}描く蠟燭ひとつ
写真とは実物を超え絵の中に林檎^{やじゅうろう}おのづと質量を増す
風景はのどかに画布に囚はれる細密な筆に別世界となり
人住まぬ百合野山莊池の^へ辺に見ては『レベッカ』のマンダレイ想ひき
まつさきに船着場へと降りてみる山莊はなほ吾に『レベッカ』
手強きは誰もたよらぬ人でなく他人^{ひと}にたよれる力もつ人

サ ハ ラ の 星 木 原 師 子 佐 賀

濯ぎ物端に追ひやり干し柿を吊るす陽のなか秋風のなか
渋柿を甘柿にするおまじなひ指先で揉む、もむもむもむもむ

太陽の光のたふと風たふとわが指先のたふとし、干し柿

砂山をあへぎ登りき暁光を目指しサハラの星降る夜を

善人になりし気分ををろがみぬサハラ砂漠の地平の日の出

「あつ、桜」見紛ふほどのアーモンドの花は満ちみつ二月のモロッコ

フ ェ イ ク 新 屋 希 子 熊本

冬枯れの桜の樹々は鎮もれり胴に師団の札を結びて
境内に犬、馬、鳩の像のあり軍用動物の慰霊碑と知る
弾痕の残る軍服展示され少年サイズの身幅とおもふ
祖父果てし南洋の島は小さかりき戦争資料館の地図に名はなし
精神の力を信じし戦中の婦人の髪で縫りし船縄
A Iで彩色されし戦時写真フエイクのやうに鸚鵡があそぶ

は う き 草 日 名 子 宏 子 大 分

黄に熟れし花梨がひとつ木に残る遅く来たりし秋も深みて
庭隅にひとところ明るき石^{つば}路の花今年の遅き冬告ぐるがに
やうやくに冬は来たりぬ糸のころ草 草紅葉して路地に吹かるる
軒端まで伸びし蔓バラつづらなる赤き実零す冬ざれの庭
北風にふるふるパンジー寒に耐へ根を張りみごとな花咲かすとふ
はうき草うまく育ちて赤あかと師走の門の風に立ちをり

☆

☆